

知的障害にある特性に適した資質・能力の育成のための指導形態を考える

—各教科等を合わせた指導とインクルーシブ教育へのアクセス—

企画	細川 かおり（千葉大学教育学部） 橋本 創一（東京学芸大学教育実践研究支援センター）
司会	橋本 創一（東京学芸大学教育実践研究支援センター）
話題提供者	米田 宏樹（筑波大学人間系障害科学域） 名古屋恒彦（植草学園大学発達教育学部） 細川かおり（千葉大学教育学部）
指定討論者	加藤 宏昭（文部科学省初等中等教育局特別支援教育課）

KEY WORDS: 知的障害教育, 資質・能力, 指導の形態, 各教科等を合わせた指導

【企画趣旨・指定討論】

新しい学習指導要領では、資質・能力の育成が求められている。OECD はキー・コンピテンシーとして「個人が深く考え、行動することの必要性」を中心にしていくつかを示しているが、学習指導要領においても、自立した人間として主体的に学びに向かい人生を切り開いていく姿と、そのために必要な生きる力として資質・能力として3観点から具体化している。知的障害教育においては、キャリア教育や学習による生活の質の向上もこうした資質・能力と関係している。知的障害の「学習により得た知識・技能が断片的になりやすい」「実際の生活の場で応用されにくい」等の障害特性にあわせて、これまで指導方法が工夫されてきたが、その一つに各教科等を合わせた指導がある。一方、近年インクルーシブ教育システムの構築のなかで、通常教育との接続性から学習内容の整理が行われている。これらを踏まえて、知的障害の資質・能力の育成をどう捉え、どう指導したらよいのか、その実践である指導の形態には、学習内容を明確化した「教科別の指導」が効果的か、生活中心の活動プロセスを重視した「各教科等を合わせた指導」が効果的か、インクルーシブ教育へのアクセスはどうあるべきかについて実践及び研究的な視点の両者から討論したい。

【話題提供】

多様な知的障害生徒の資質・能力の育成と授業

知的障害特別支援学校には、近年比較的軽度の児童生徒が増加している一方で、高等部段階でも表出言語が数語であり、着替えや排泄など日常生活の指導が課題とされる生徒も共に学習している。こうした生徒は高等部段階で示されている「教科別指導」の内容に取り組むことに難しさを示すが、しかし作業学習の中での学習により数学的な見方を学び用いるなど、資質・能力の育成が可能である。また比較的軽度の生徒も教科別の内容を生活に活かす学びや、多様な生徒との学びの中で「集団での交流力」を育成できる。教室におけるインクルーシブは多様性を包含する教室環境の変容を求めるものであるなら、多様な生徒が共に学び資質・能力を育成する授業づくりが求められるのではないだろうか。（細川かおり）

知的障害教育各教科の特徴と「合わせた指導」の必要性

知的障害教育では、知的障害の学習特性等を踏まえ、児童生徒が、意欲・主体性を伴った力を身に付け生活上の課題を達成・解決できるように、実際の経験の中核に据えた学習内容（活動）の組織化が追求されてきた。知的障害者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校におけ

る各教科（知的障害教育教科）の特徴は、「通常の教科」以前の指導内容を含み、実生活に活用するための「教科」以後の内容も含むものである点である。また、児童生徒の知的障害の状態や経験等に応じて、各教科の示す内容を基に、各学校で「生活に結びつく具体的な内容」を設定し、児童生徒が実際の状況下で体験的に活動できるようにするための「合わせた指導」が、その特徴的な指導形態として必要とされてきた。そして、各教科と指導形態の両方の特徴を担保するものとして、1970 年には「生活」が、「社会」、「理科」、「家庭」、「体育の保健」に関する内容を中心に他の教科の一部も含む教科として設定され、現在に至っている。「生活」は、「各教科の内容を合わせる際の中心教科とするため」・「各教科に内容を分けない際の中心的内容とするため」に、その必要性が認められた。以上の経緯を踏まえ、個々の児童生徒の知的発達の水準に即し、かつ、生活年齢に応じた指導のために、「教科」以後の内容と「合わせた指導」の重要性と普遍性を考察したい。（米田宏樹）

「育成を目指す資質・能力」と「各教科等を合わせた指導」

2017 年以降公示された学習指導要領では、いずれの学校種においても、各教科等の目標及び内容を「育成を目指す資質・能力」に基づいて再構成した。このことは、「生きる力」を養うことを強く打ち出した新学習指導要領の大きな特徴である。これによって、特別支援学校学習指導要領にある知的障害教育教科は、その教科名に加え、通常の学校における各教科との新たな共通言語を得たことになる。すなわち、いずれも「育成を目指す資質・能力」という共通のフォーマットで教科を示すことで、両者の教科が共に目指すものを、共通言語で説明できる道が拓かれたのであり、期せずしてインクルーシブ教育システム構築への大きな前進を果たしたことを意味する。

「各教科等を合わせた指導」は、その指導の独自性だけでなく、教育内容となる各教科等、とりわけ各教科の独自性ゆえに、通常教育との連続性が見出しにくいという面があった。「育成を目指す資質・能力」によって「各教科等を合わせた指導」が指導する各教科を把握することによって、通常教育における各教科との連続性の明確化を図ることが期待される。その方途として、「育成を目指す資質・能力」から見た知的障害教育教科、そして「各教科等を合わせた指導」の学習評価のあり方を考えたい。（名古屋恒彦）

【付記：本報告は JSPS 科研費 18H01037 による研究成果の一部である。】

(HOSOKAWA Kaori, HASHIMOTO Soichi, YONEDA Hiroki, NAGOYA Tsunehiko, KATOU Hiroaki)